

童男山11。12号古墳

高崎県入女町大字山根字庄山川の西側

八女市文化財調査報告書 第16集

1985

八女市教育委員会

序

福岡県教育委員会が昭和55年に作成した福岡県遺跡等分布地図（八女市・八女郡編）によるところ、この区域には福岡県指定史跡「童男山古墳」をはじめ27基の古墳が認められております。

調査は、国・県の補助を得て土地所有者の蒲池 孝氏ほか関係各位のご指導ご協力により実施し、所期の目的を果すことができ、その調査結果について今回刊行のはこびとなりました。

本書の刊行にあたり、調査のご指導を賜りました福岡県教育庁南筑後教育事務所川述昭人氏をはじめ発掘作業等をされた関係各位のご協力に対し深く感謝申し上げます。

昭和60年3月30日

八女市教育委員会

教育長 坂田 不二夫

例 言

1. 本書は、八女市が国、県の補助を受けて実施した、八女市大字山内所在の童男山11号、12号古墳の調査報告書である。
2. 発掘調査は、八女市教育委員会が主体となり実施した。調査期間中佐田 茂（東海大学助教授）、川述昭人（県教育庁南筑後教育事務所技術主査）両氏の援助を受けた。
3. 出土遺物の整理は、岩戸山歴史資料館（田中道夫館長）において、赤崎敏男の指導のもとに横田公己、田辺神奈が行なった。
4. 出土鉄器、柄頭の保存処理は、九州歴史資料館技術主査 横田義章氏にお願いした。
5. 遺構の実測は、調査員、調査補助員で行ない、遺物の実測は、赤崎、横田が、浄書は赤崎が行なった。
6. 遺構写真は、川述、赤崎が撮影し、遺物は赤崎が撮影した。
7. 本書の執筆、編集は赤崎が行なった。

本文目次

I はじめ	1	IV まとめ	20
II 位置と環境	3	V おわりに	24
III 調査の概要	4		

I はじめに

童男山11号・12号墳は、八女市大字山内字上ノ原635-2番地にある。

当該地は、巨石古墳で有名な童男山古墳（県指定史跡）を中心として、古墳の多い所として知られており、江戸時代、矢野一貞の著した『筑後將士軍談』中にも、「童男山窟中之図」として、童男山古墳を始め、周辺古墳群の詳細な図を載せている。また、奏の徐福の伝説が現在でも残っており、毎年1月20日に、「童男山ふすべ」の行事が地元の人々を中心に行なわれている。

昭和58年10月、地元の蒲池 孝氏から、畠地化のため、当該地の発掘届が提出された。当該地は分布調査によって、古墳2基が存在することが確認されていたため、八女市教育委員会は県文化課南筑後教育事務所と協議をして、昭和59年度国庫補助事業として調査を実施することになり、昭和59年6月1日から7月19日までの期間、調査を実施した。

調査関係者は、次のとおりである。

八女市教育委員会、教育長 坂田不二夫

社会教育課、課長 松延繁太、同係長 杉山信行、同主任 小野勝輝、同係 田中博文、平田高義、川口美文、松尾弘子、赤崎敏男（調査担当）

調査員 東海大学助教授 佐田 茂、南筑後教育事務所技術主査 川述昭人

調査補助員、田中康信、横田公己

調査作業員、池田謙、西村時夫、池田厚之、栗原広志、大津直幹、蒲池 孝、星野 明、加藤満義、大津サヨ子、今井文枝、甲木マスエ、江崎ひさえ、泉つるよ、田辺神奈



第1図 11号古墳全景(2次墓道面)【南から】



- | | | | |
|-----------|------------|-------------|------------|
| 1. 竜男山古墳 | 6. 丸山古墳 | 11. 牛焼谷窯跡群 | 16. 柳島古墳群 |
| 2. 竜男山古墳群 | 7. 立山山古墳群 | 12. 管の谷窯跡群 | 17. 柳島古墳群 |
| 3. 長野古墳群 | 8. 立山山塊輪窯跡 | 13. 中尾谷窯跡群 | 18. 柳島古墳群 |
| 4. 日迫山古墳群 | 9. 麋子島山古墳群 | 14. 三助山窯跡群 | 19. 北田形古墳群 |
| 5. 平原古墳群 | 10. 牛焼谷古墳群 | 15. 堀路女喜古墳群 | 20. 浦田横穴墓群 |
| | | | 21. 後田横穴墓群 |

第2図 竜男山古墳群と周辺の遺跡 (1/25,000)

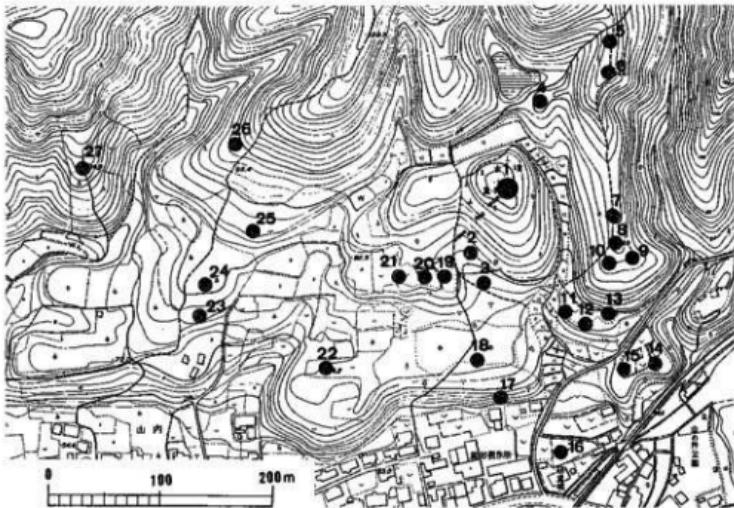
なお、調査にあたって、福岡県文化財保護指導員 木附光雄氏、童男山古墳を守る会（大津直幹会長ほか48名）をはじめ、地権者の蒲池 孝氏、山内町内会の皆様には、多大なる御援助をいただいた。記して謝意を表します。

II 位置と環境

童男山古墳群が立地する場所は、西側が三瀬町まで約10数kmにわたってのびた八女丘陵の最東部であり、矢部川と八女市柳島付近で合流する星野川の右岸にある。この付近になると、丘陵も標高190m前後となる。本来、地質学上から見れば、段丘の発達した八女市豊福付近までを八女丘陵と呼ぶが、古墳群から見ると、八女市山内・長野付近までを含めて、八女丘陵古墳群と呼んでいる。

童男山古墳群は、県指定史跡「童男山古墳（1号墳）」を中心として周辺に所在する古墳群で現在27基を確認している。古墳は大きく分けて、1号墳の東側尾根上に4～16号まで13基、1号墳から南にのびる同一尾根上に1～3号、17～22号の9基、西側に浅い谷を挟んで23～27号まで5基の3つのグループがある。しかし、周辺は開墾が進んでおり、壊された古墳もかなりあるようである。

童男山古墳群周辺には、古墳が多く、東側300mの所に長野古墳群（15基）があり、この古墳群が、八女丘陵古墳群の最奥部にある。西側に続く丘陵上には、日迫山古墳群（19基）、平原古墳群（27基）、立山丸山古墳（前方後円墳、国指定）、昭和56・58年に調査された立山山古墳群（45基）、本古墳群（6基）、鹿児島山古墳群（17基）があり、岩戸山古墳にと続く。古墳群



第3図 童男山古墳群位置図 (1/5,000)

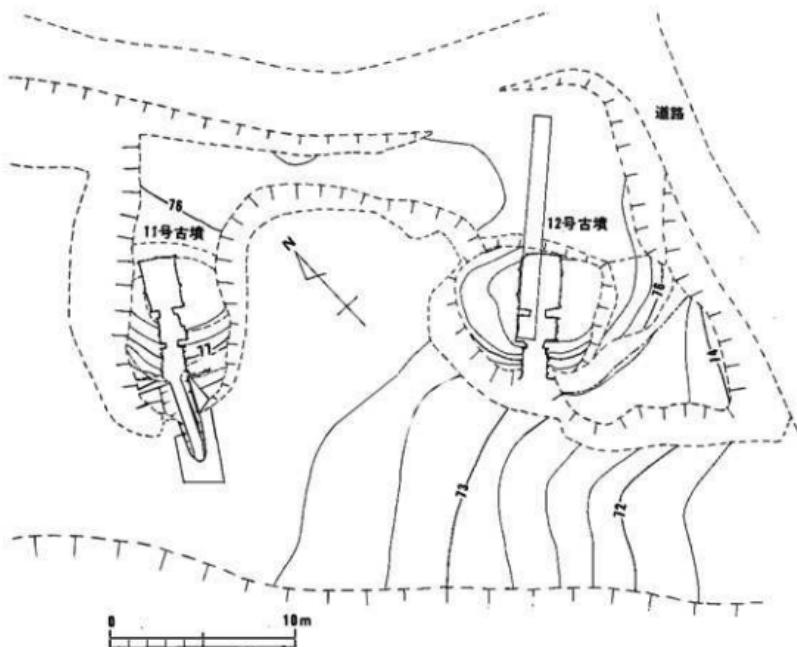
の北側には、牛焼谷、菅の谷、三助山、中尾谷、など、古墳時代から奈良時代にかけての窯跡群があり、立山山では、埴輪窯も調査されている。南側は、星野川を隔てた対岸に帰路女喜古墳群（7基）、柳島古墳群（10基）、北田形古墳群（7基）がある。

III 調査の概要

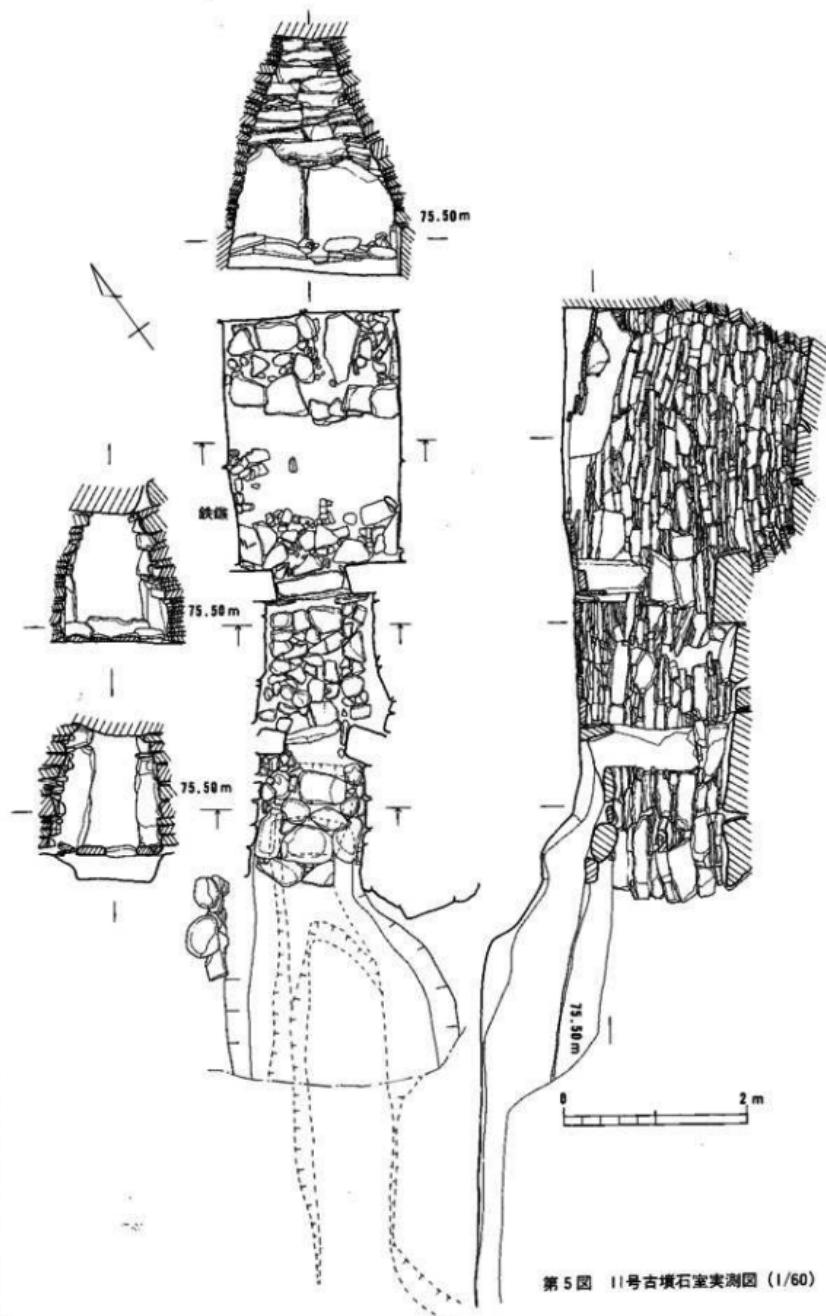
童男山11、12号墳は、童男山古墳（1号墳）の南約130m、標高78mの所に、ほばならんで築かれている。

1. 11号古墳

(1)墳丘 墳丘はすでに周囲を大きく削られていた。このため、古墳の規模は不明であるが、石室の中心から墓道までの長さを考えると、直径15m程の円墳と考えられる。墳丘に対して、トレンチを設定できなかったが、削られた部分の土層観察から、斜面を利用して墓壙をつくって、石室を構築しており、盛り土はあまり行なっていない。



第4図 童男山11・12号墳地形測量図 (1/300)



第5図 11号古墳石室実測図 (1/60)

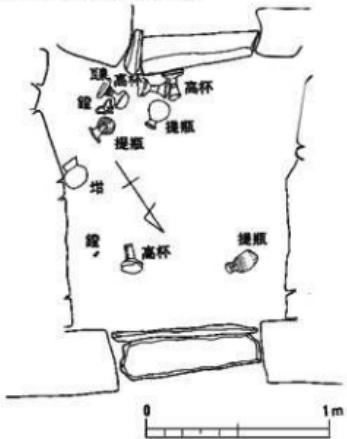
(2)石室 内部主体は、主軸をN-33°-Eにとり、ほぼ南西に開口する複室構造の横穴式石室で、結晶片岩の扁平な石材でつくられている。

玄室は、左右側壁付近で長さ2.73m、奥壁付近で幅1.85m、袖石付近で幅1.75mをはかり、長方形を呈している。奥壁は1.3m×1.0m前後の石を2枚横位にして腰石としており、その上に扁平な石を持ち送りながら平積みをしている。両側壁は1.6m×0.8m、1.0m×0.3mの扁平石を横位に2枚おいて腰石としており、その上に扁平な石を積み上げている。積み方は、腰石の高さまで全体を平坦にして1段とし、2段目は、斜面と同じ傾斜をもたせ、3段目～5段目はほぼ水平に積み上げながら、内側に約20度の角度を持ち送り、天井石を構築させている。玄室床面には、奥壁から1.5m幅で棺床がつくられており、右側壁側には棺側壁の一部が残っている。棺床は石室床面より30cm程高く、床には扁平石を敷き、そのすき間に河原石や玉石を入れている。玄室の敷石は、袖石付近がよく残り、扁平石を敷いた間には河原石を入れている。

袖石間に平石を仕切石として、その外側に縁泥片岩の板石を立てて樋石としている。

前室は長さ1.4～1.5m、幅1.15～1.4mの方形を呈している。両側壁は、下段を薄い扁平石で積み、中段以上にやや厚い扁平石を積み上げている。床面は扁平石を敷きつめており、前室入口の袖石間に仕切石を据えている。

羨道は短かく、両側壁もやや厚手の扁平石を積み上げている。閉塞は前室入口で行なっており、大きな河原石を積み上げて閉鎖していたことがわかる。閉塞石を除いた結果、下層より、古い段階での墓道が検出された。墓道は羨道から斜面側に4m程続いており、羨道付近で階段状になりながら下降する。



第6図 11号古墳前室遺物出土状態(1/30)



第7図 11号古墳(第1次墓道)(南から)



1. 11号古墳石室〔前室から玄室をのぞむ〕



2. 11号古墳石室〔玄室から前室をのぞむ〕

(3)出土遺物 前室内から、ほぼ現位置を保って須恵器、鉄器が出土した。そのほかは、いずれも石室内排土中から出土したものである。

① 装身具

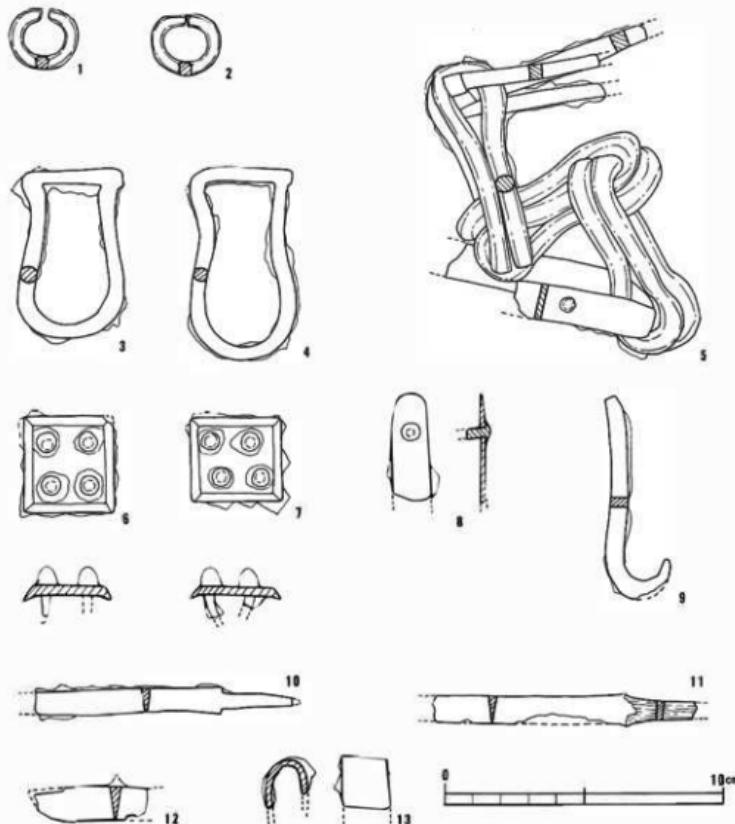
耳環（1・2）銅地銀張りで、1、2とも長径2.5cm、短径2.2cmと同じ大きさである。

② 鉄 器

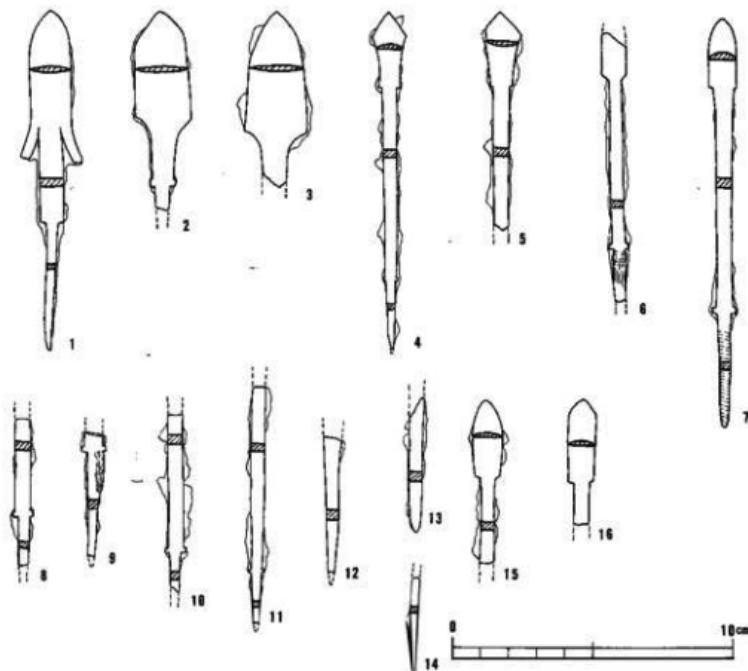
鉗具（3・4）円形の鉄棒を折り曲げており、3・4とも剥金を欠いている。

木製鉄張鎧（5・8）5は輪鎧と、それに続く鎖、鉗具が残っている。8は、輪鎧の破片である。

留金具（6・7）鉄製で、一边3.3cmの方形を呈する。鉄は4本あり、7はややづれしている。



第8図 12号古墳出土装身具・鉄器 (1/2)



第9図 12号古墳出土鉄器 (1/2)

刀子 (10・11・12) 10・11はほぼ同じ大きさで、茎の部分が良く残る。11には茎部分に木質が残る。12は切先の破片である。

刀装具 (13) 小破片であるが、鞘口の金具と思われる、鉄製である。

不明鉄器 (9) 釣針状を呈しているが、断面が長方形である。

鉄鎌 (1~14) 玄室内、および、玄室排土中より10個体以上出土した。

1は完形品で、腸抉広根柳葉式、2・3は茎を欠くが、有段広根柳葉式、4・5は主頭細根矛箭式、6・7、15~17は細根柳葉式である。8~14は茎のみであるため、形式は不明である。

③ 土 器

出土した土器のうち2、5~7、12~16は前室敷石上面から出土、3、10は玄室排土中、1、4、8、9、11は、墓道上面から出土した。青磁および土師器は、前室排土中と墓道より出土している。

杯蓋 (1) 直径12.8cm、とやや大形で、天井部と体部の境は明瞭である。全体に薄いつくりで、天井外面はヘラケズリ、内面はナデ、そのほかは横ナデ調整をしている。天井から体部の部分にヘラ記号がある。胎土、焼成は良く、淡茶褐色を呈す。

杯身（2・3） 大小2タイプの杯身がある。2は口径8.8cm、3は口径10.6cmをはかる。いずれも外面底部は回転ヘラケズリ、そのほかは横ナデで仕上げる。胎土、焼成は良く、2は淡灰色、3は青灰色を呈する。

杯蓋・身（4・8） 4は口径8.8cm、かえりが立ち上がり、薄くつくられている。天井部にはつまみが付く。天井から体部にかけては細かなカキ目が施される。胎土、焼成とも良く、青灰色を呈す。8は口径10.4cmで、丸味がある。天井部は回転ヘラケズリ、内面はナデ、そのほかは横ナデで調整されている。胎土、焼成とも良く、青灰色を呈す。4・8はセットと思われる。

長頸壺（10） 口径8cm、口縁はややふくらみを持って立ち上がる。胎土、焼成も良く、青灰色を呈す。

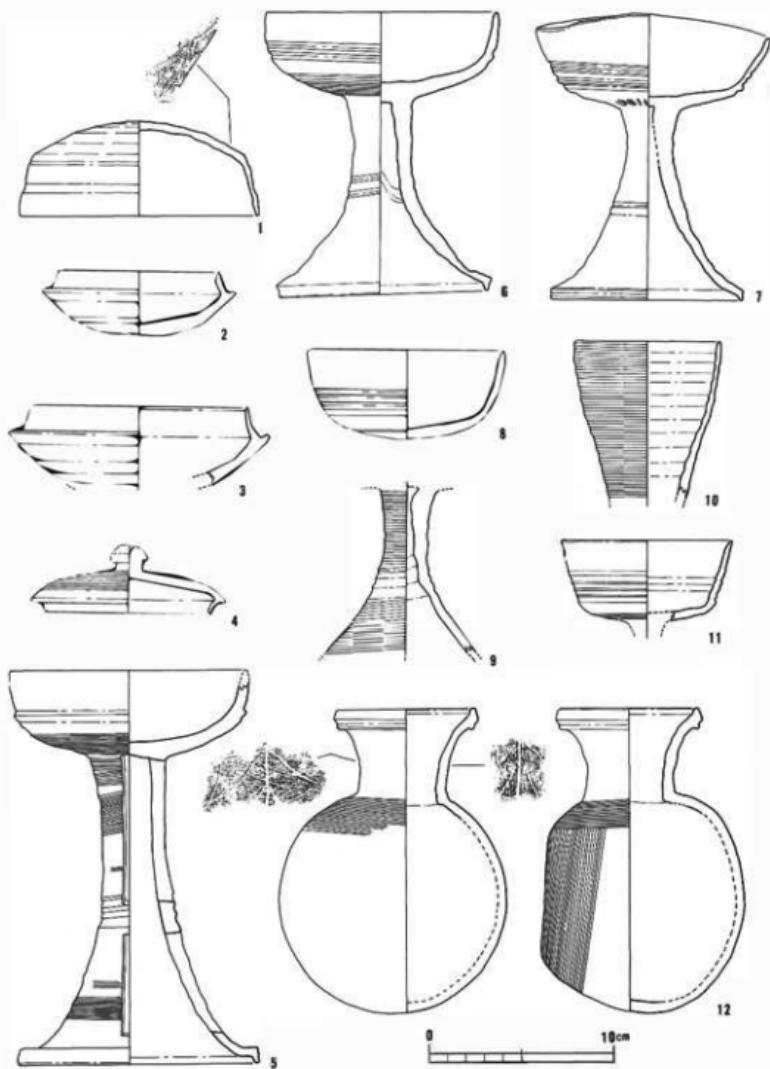
高杯（5～7、9・11） 5は長脚2段透しの高杯で、砂を余り含まないが、焼成は悪く、茶黄色を呈す。6・7は同じタイプの高杯である。胎土は7が細砂を多く含む。焼成は、8が焼成不良のため淡赤褐色。7は焼成が良く、青灰色を呈しているが、杯部にゆがみを生じている。9・11はいずれも小形の高杯である。9は脚片で、カキ目調整を行なっている。11は杯部片で、口径9.1cm、体部に沈線がある。脚部との接合面付近のみカキ目調整、そのほかはヨコナデ調整である。いずれも胎土、焼成は良く、青灰色を呈している。

提瓶（12～14） いずれも小形の提瓶で、胴部の背面は平坦で、カキ目調整を行なっている。12は口縁下にヘラ記号がある。いずれも胎土、焼成は良く、青灰色を呈している。13には全体に窯壁の一部が付着している。

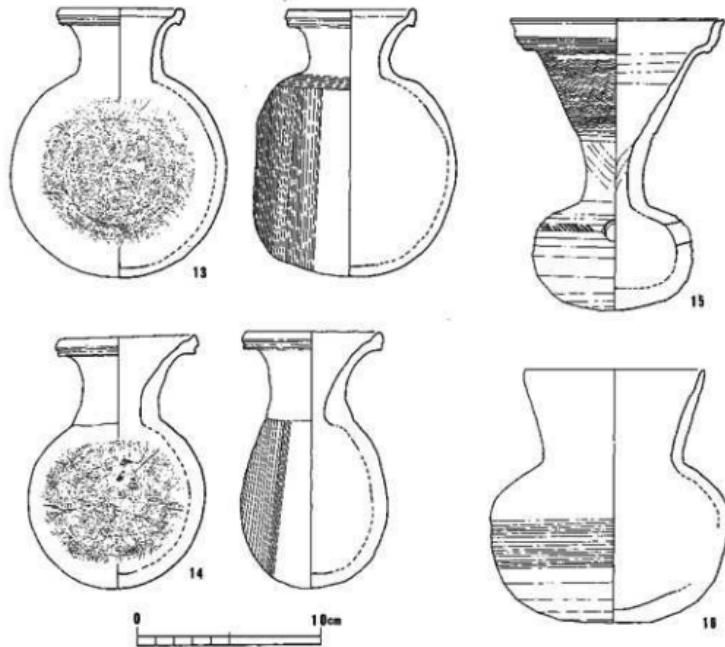
甌（15） 口縁部は段があり外方へ開く。口縁下にはやや荒い櫛描波状文が施されている。頭



第10図 11号古墳前室内遺物出土状態〔表道から〕



第11図 11号古墳出土土器 (1/3)



第12図 11号古墳出土土器 (1/3)

部の内外には、シボリ痕が残る。胎土、焼成は良く、青灰色を呈している。

直口壺 (16) 口径9.6cm、やや角ばった感じがする。胴部はカキ目、底部は回転ヘラケズリ調整している。胎土は良いが、焼成不良で淡赤褐色。

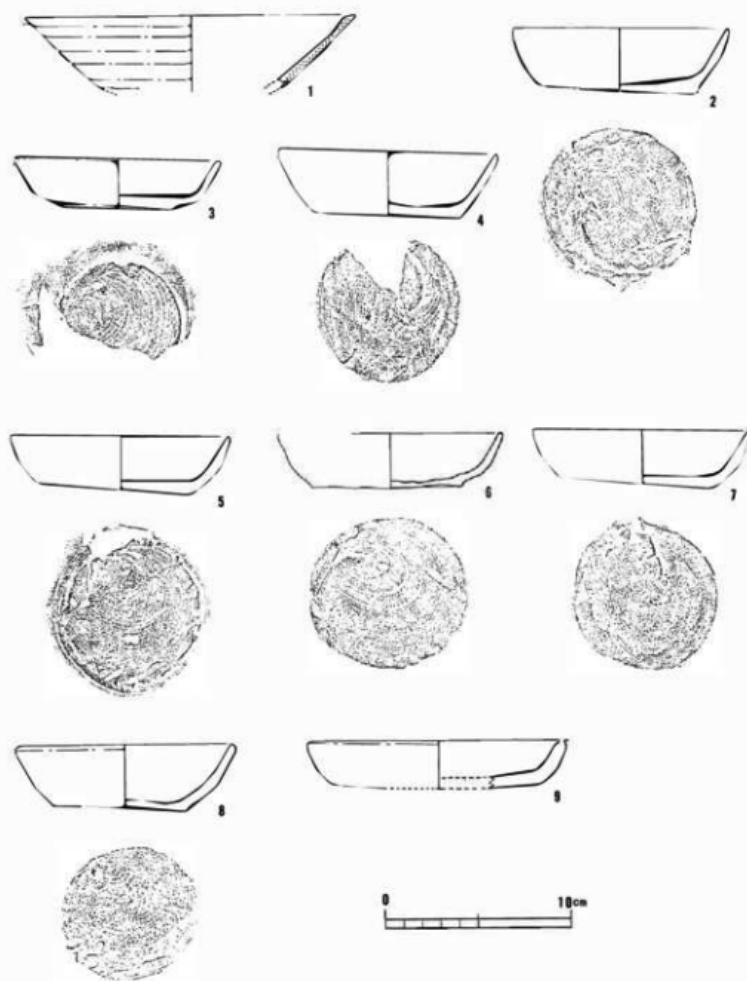
青磁 (第13図1)

上層の墓道の上層から出土、口径17.6cmの楕で、胎土はやや灰色を帯び、鉄分を多く含む、釉薬はややすくすんだ青で、全体にかかっている。

土師器 (第13図)

杯 (2~8) 口径約11cm~12cm、高さ2.7cm~3.5cmの杯である。いずれも底部は糸切り離しを行っている。

皿 (9) 復元口径13.7cm、高さ2.6cmの皿で、底部の切り離しは、小片のため不明である。



第13図 11号古墳出土青磁・土器 (1/3)

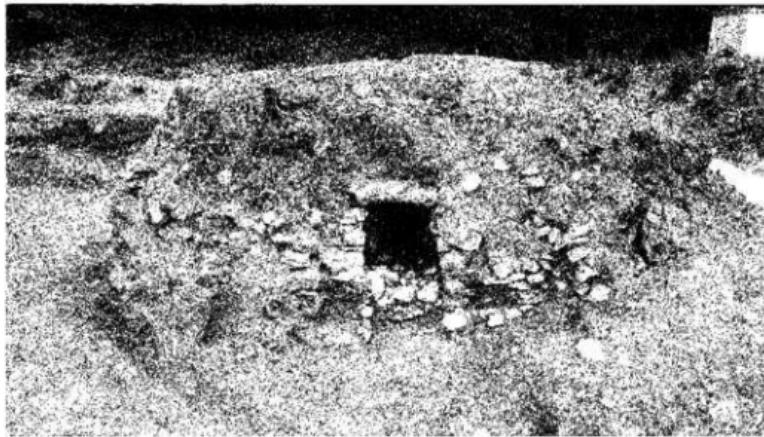
2. 12号古墳

(1)墳丘（第4図）墳丘は東側を除いた周囲をすでに大きく削られていた。東側の一部にトレーナーを設定して、墳丘の土層状態を調査したが、開墾等によりすでに石室付近まで削平されていた。しかし、南側の一部に墳丘裾と思われる部分が残っており、石室の中心を古墳の中心と考えると、直径16m前後の円墳となる。

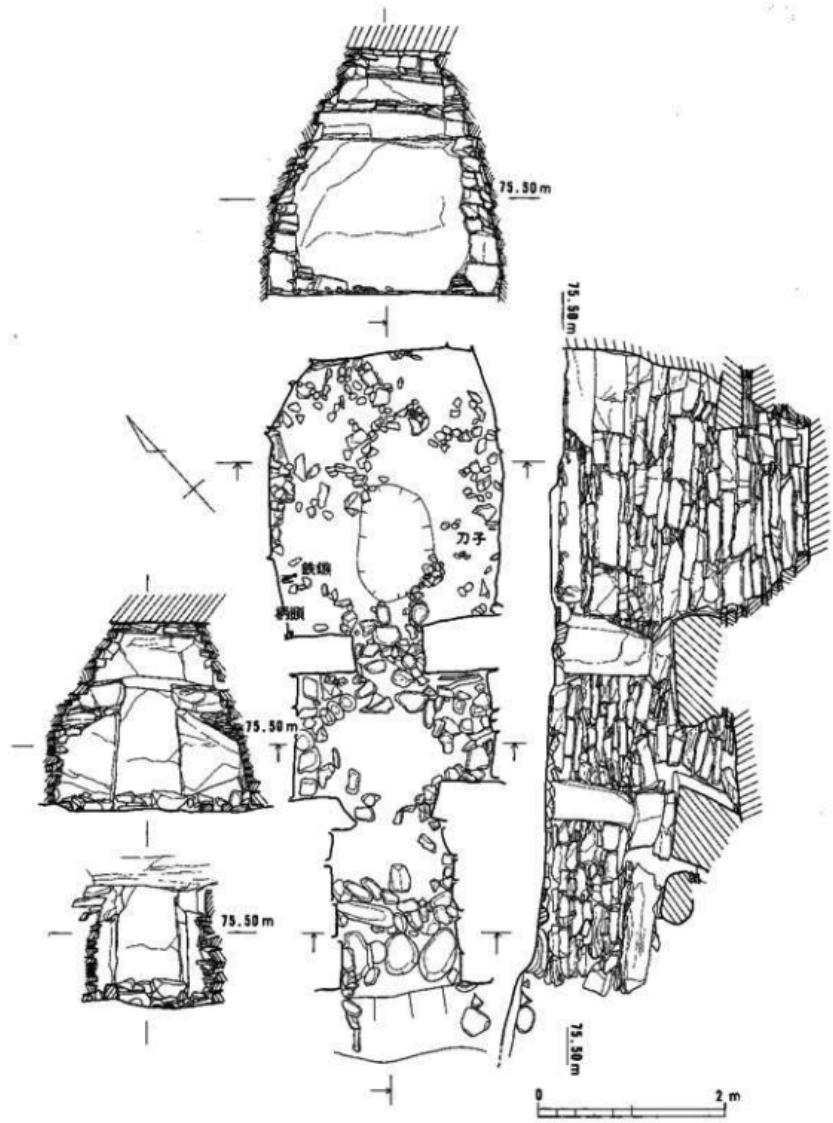
(2)石室（第15図）内部主体は、主軸をN-48°-Eにとり、ほぼ南西に開口する複室構造の横穴式石室である。石室の石材はすべて結晶片岩の扁平石である。

玄室は、奥壁付近で幅1.72m、中央部で幅2.50m、袖石付近で幅2.30m、右側壁付近で長さ2.82m、左側壁付近で長さ2.82mをはかり、やや胴の張った方形を呈している。奥壁は、幅1.50m、高さ1.70mの一枚石を用い、その上に奥壁から50cmせり出した厚さ30cmの棚石をのせてている。床面から、棚石までの高さは1.6mをはかる。両側壁は、扁平な石を床から持ち送りながら平積みしている。石材の用い方は、下半分にやや大きめの石を使用し、各石材の詰め石として小片を用いる。側壁はまず床面から60cm程まで大きめの石を使用して面を整え、その後、石棚部分までやや大ぶりの石を積み上げて再び面を整え、その後、天井まで積みあげ天井石を構築している。玄室床面は、すでに盗掘を受けており、玉石、河原石、結晶片岩片が散乱していたが、比較的奥壁寄りに敷石が残っていた。袖石付近には、やや大き目の河原石が置いてある。

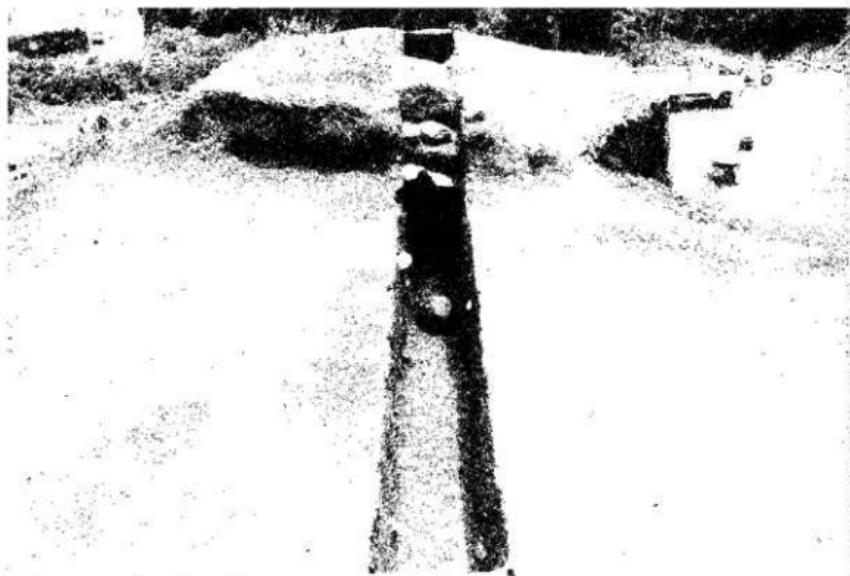
前室は、幅2.10m、右側壁付近が長さ1.20m、左側壁付近が1.30mと横に長い長方形である。両側壁は天井まで小ぶりの扁平石を平積みにしている。床面は、河原石を敷いており、両側壁側が良く残っていた。



第14図 12号古墳全景〔南から〕



第15図 12号古墳石室実測図 (1/60)



1. 12号古墳北側トレンチ〔北から〕



2. 12号古墳石室〔前室から玄室をのぞむ〕

羨道は、長さ1.80m、幅1.20~1.30mと短かく、両側壁には小ぶりの扁平石を平積みしている。床面には、河原石を敷き、羨道入口付近では太めの河原石を規則的に並べており、この部分で閉塞を行なっている。

(3)出土遺物 遺物は、玄室内右側壁付近より刀子が、左側壁付近より鉄鎌が、左側壁に接し、柄頭を袖側に向けて金銅製主頭大刀柄頭が出土した。また、羨道入口より、須恵器杯身片が出士している。

① 金銅製主頭太刀柄頭（第17図、第19図）

柄頭は、長さ6.5cm、幅3.6~4.2cmで、縁金物側が狭くなる。覆輪状の外郭、内郭とも良く残っている。外郭は、銅地金張りで、中央がやや角ばっている。内郭は、薄い銀板であり、縣通穴の部分両面には、木葉形の飾りを金銅製の釘で銀板の上へ3~5ヶ所とめている。木葉形の飾りは、銅地金張りで、上側に「△」の文様が2ヶ所、左右に「O」が2ヶ所透し彫りされ、全体に細かな円形の打ち出しが行なわれている。鍔元には、金銅製の縁金物がはめられている。また、柄頭内部には、木質が一部残っていた。

② 鉄器（第17図）

鉄鎌（1~9）1~3、8はいずれも細根柳葉式である。4~7は茎だけのため不明である。

刀子（9）約半分の破片で、刀身、茎の部分が残っている。

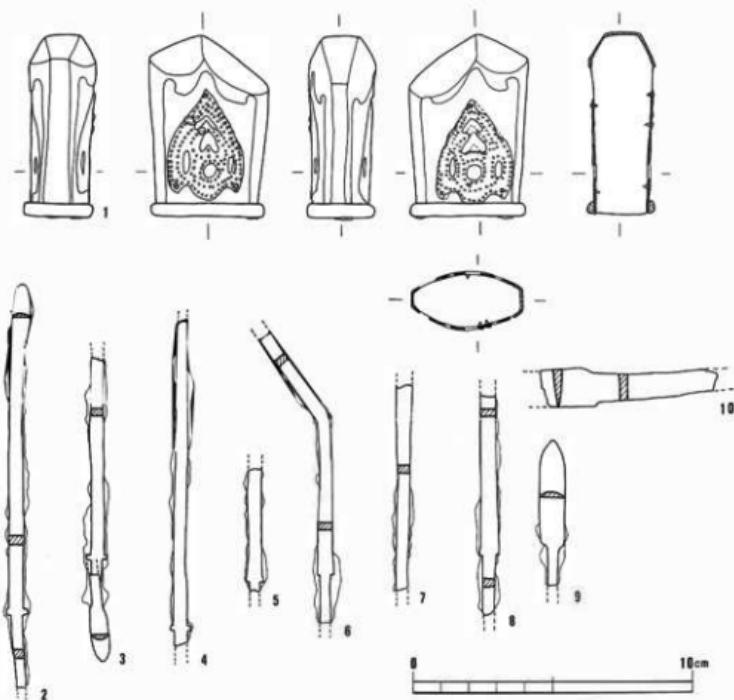
③ 土器（第20図）

土器は、わずかに杯身片が1点出土した。

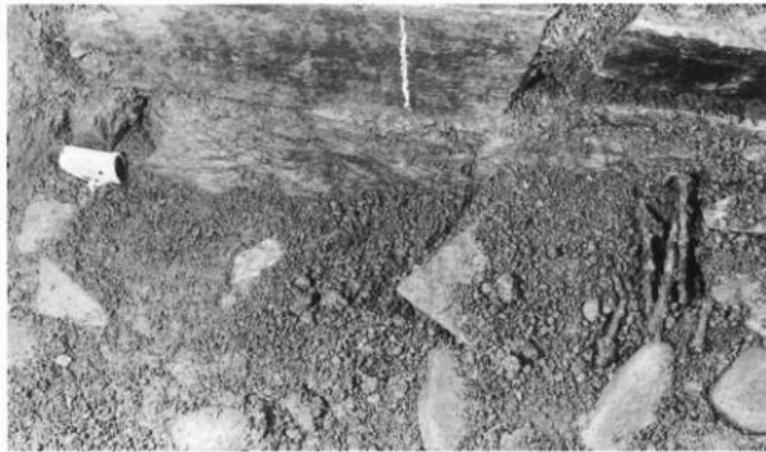
杯身（1）復元口径11.0cmで、やや内向する高さ1.3cmの立ち上がりを持つ。全体に薄いつく



第16図 12号古墳石室〔羨道から前室をのぞむ〕



第17図 12号古墳出土圭頭大刀柄頭・鉄器 (1/2)



第18図 12号古墳玄室内遺物出土状態



第19図 金銅装主頭大刀柄頭

りで、外面底部は回転ヘラケズリ、内面はナ
デ、そのほかは横ナデで調整される。胎土、
焼成とも良く、淡赤褐色を呈す。

④ 石棺 (第21、22図)

石室内の清掃中、約100ヶ余りの阿蘇熔結

凝灰岩が出土した。その最大のものは、長さ1.80m、幅0.8mで奥壁に立てかけた状態であった。大小約100ヶ余りの凝灰岩を復元してみると、3個の剝抜式棺身と、3個の剝抜式棺蓋を確認できた。

1号棺蓋 家形石棺、両端部の破片で2個が確認できた。天井中央には、造り出された梁が走り、切妻形を呈する。規模等は不明だが、1号棺身とほぼ同規模と考えられる。

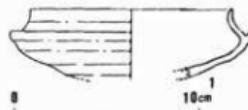
2号棺蓋 (1) 家形石棺の端部片である。小片のため形態はわからないが、頂部に幅広い平坦面を持ち、内面にも割り込みがある形のものと考えられる。

3号棺蓋 (3) 小形の石棺である。長さは不明だが、幅は0.48mある。家形石棺の範疇に入るとと思われる。頂部に幅広い平坦面を持ち、内面にも割り込みが見られる。全体に工具痕が良く残っている。

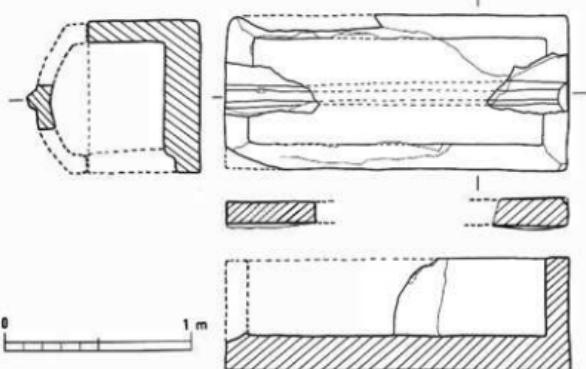
1号棺身 数個に割れた棺材から復元すると、長さ1.85m、幅0.83m、高さ0.60mで長方形剝抜式の石棺身となる。内法は、長さ1.58m、幅0.57m、高さ0.42mをはかる。底部角はわずかに丸味を持ってつくられており、内側には明瞭な工具痕が残っている。

2号棺身 (2) 棺身の一部であるため、全体の形は不明であるが、底面の部分が丸味を持った剝抜式の石棺身となる。厚さから見て小形の棺で、内部には明瞭な工具痕が残る。

3号棺身 (4) 端部片である。底面の部分は平坦で、剝抜式の石棺身となる。2号棺身と同



第20図 12号古墳出土須恵器 (1/3)



第21図 12号古墳出土1号石棺蓋・身 (1/30)

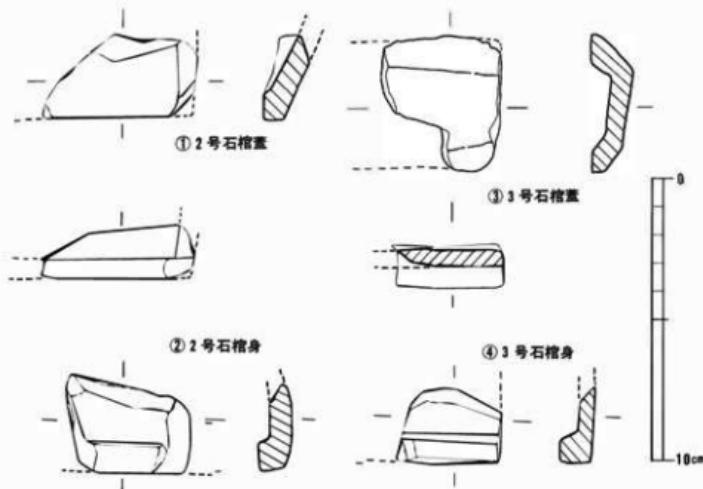
じ小形の棺で、内部には明瞭な工具痕が残る。

IV ま と め

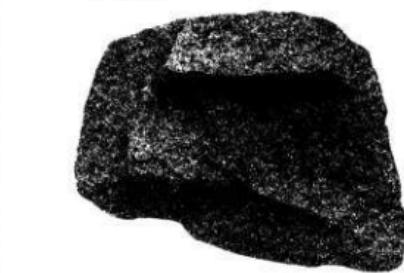
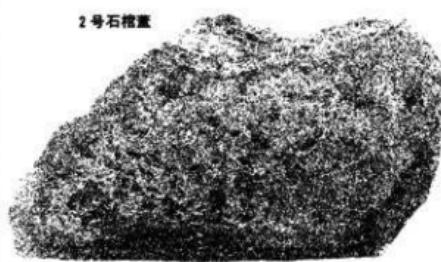
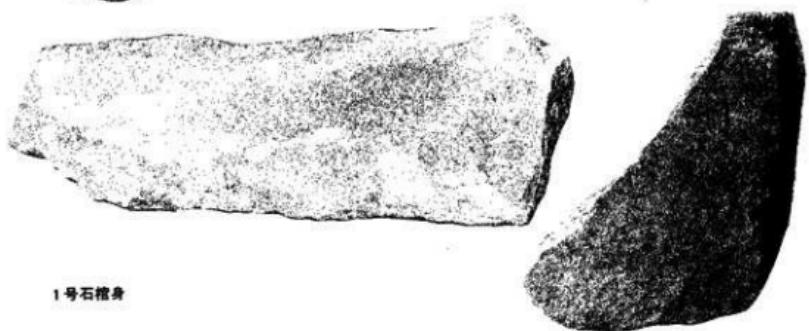
1. 童男山古墳群について

今回調査を実施した童男山11・12号墳を含め、童男山古墳群は総数27基からなる古墳群である。昭和53年八女市教育委員会が実施した分布調査および、筑後考古学会が行った分布調査から、古墳群の概要の表1を作成した。

これを見ると、古墳群はいずれも円墳で、内部主体は横穴式石室である。横穴式石室も複室



第22図 12号古墳出土2・3号石棺蓋・身 (1/20)



12号古墳出土石棺

構造を持つものが多いようである。このほか、古墳群の特色として、内部施設に石屋形、石棚
棺床、石棺が多いことは、すでに江戸時代からも注目されていた。^{註1} 27基の古墳群中、15基の古
墳の内部施設が判明しているが、その内8基と約半数の古墳に、石屋形、石棚、棺床、石棺な
どの施設がある。

石屋形を持つ古墳は、現在1号、2号と2基判明している。八女古墳群では、このほか広川
町弘化谷古墳が石屋形を持つ古墳として知られている。この石屋形を持つ古墳は、熊本県北部、^{註2}
菊池川流域と白川流域など有明海に沿ぐ川の流域に集中して分布することが指摘されており、
八女地方以北では、玄海町桜京古墳と桂川町王塚古墳に例がある。

石棚を持つ古墳は、2号、12号、16号、25号で、いずれも割抜石棺や棺床を伴う場合が多い。
石棚を持つ古墳は、八女古墳群では、今まで童男山古墳群以外では発見されておらず、わず
かに広川町内田古墳に両側壁から支え石を出した石棚が見られる。石棚を持つ古墳は、八女地
方以北では浮羽地方をはじめ、北部九州地方には点々と見ることができる。

2. 墳丘、石室構造について

11号・12号とも、すでに墳丘周辺を削平されており、規模はわからないが、直径15m前後の
円墳と考えられる。童男山古墳群では、1号墳の直径48mがきわめて大きく、このほかの古
墳はいずれも直径10~20m前後が多い。

11号墳は、複室構造の横穴式石室であり、玄室、前室の平面形態、奥壁、側壁に腰石を用い
^{註4} その上を平積みする点などの石室構造は、乗場古墳の石室構造に類似している。

12号墳も、複室構造の横穴式石室で、玄室の平面形態は方形で、この地方通有の胴張りを持
った石室である。奥壁は腰石を置き、その上に棚石をのせ、上部を平積みにしており、両側壁
^{註5} は下部から平積みにしている。平面形態などは塚ノ谷古墳と類似している。

3. 出土遺物について

① 金銅装主頭大刀柄頭

12号古墳、玄室左側壁付近から発見された主頭大刀柄頭は、筑後地方では初めての発見である。^{註6} これまで、飾大刀は、乗場古墳、釣崎3号古墳から出土した環頭大刀、広川町鈴ヶ山2号
^{註7} 墳から出土した鉄製円頭大刀が知られていた。

今回発見された主頭大刀は、刀身は発見されず、柄頭のみである。

柄頭は、覆輪状の外郭、内郭とも良く残り、内郭の銀板の上に取りつけた木葉状の飾金物ま
で残っていた。

柄頭の形態については、神林淳雄氏が分類されており、12号墳出土の柄頭は、2類（柄頭の
先端が片方やや高くなるが、角ぼったもの）にあたり、九州地方では、行橋市竹並G-121-1
^{註8} 号横穴墓、鞍手都若宮町竹原古墳出土の主頭大刀柄頭と類似している。

主頭大刀については、すでにまとめた事がありこの時は、福岡県で8遺跡、熊本県で1遺跡、

^{註11}
宮崎県で2遺跡が判明していたが、最近では、童男山12号古墳を含めて福岡県で14遺跡18例が
^{註12}
発見されている。

^{註13}
柄頭縣通部に飾金物を取り付ける例は少なく、現在まで飯塚市池田1号横穴墓、千葉県鶴巻
^{註14}
塚古墳、群馬県藤岡市付近、福島県白河觀音山3号横穴墓の4例だけが管見に入っている。

^{註15}
圭頭大刀を含めて、飾大刀の分布については、畿内地方が少なく、九州地方、山陰地方、畿
^{註16}
内から以東が多いという事実から、6世紀後半代に、地方支配体制を確立しようとする畿内政
^{註17}
權が、地方豪族に対する働きかけとして、飾大刀を賜与したとも考えられている。また、飾大
^{註18}
刀は、円頭大刀から圭頭大刀へと変化し、圭頭大刀は、6世紀末～7世紀前半の極めて限られた時期に出現したともいわれている。

② 出土土器

11号古墳からは、須恵器杯蓋2、杯身3、長頸壺1、高杯5、提瓶3、甌1、直口壺1が出士している。この中でも、前室から出土した土器群は、すべて完形品である。

杯蓋は、I類 つまみが無い杯蓋、II類 つまみが付き、かえりの有る杯蓋の2種類がある。杯身は、I類 立ち上がりが高く、大形の杯身、II類 立ち上がりが高く、I類より小形の杯身、III類 立ち上がりが無い杯身の3種類がある。杯蓋I・II類、杯身I・III類は、塚ノ谷4号窯跡から出土しており、III期に属している。杯身II類は、塚ノ谷1号窯から出土しており、IV期に属している。

高杯は、I類 長脚2段透しの高杯、II類 長脚の高杯、III類 小形の高杯の3種類がある。I類は、中尾谷窯跡から出土しており、III期に属している。II類は、岩戸山古墳出土の新しい土器と類似している。III類は、塚ノ谷4号窯から出土しており、III期に属している。

甌は、口縁下で屈曲して段を設け、口唇上面が水平になる特徴は、中尾谷窯跡群出土土器と同じであり、III期に属している。

このほか、長頸壺、直口壺、提瓶があるが、いずれもIII期に属している。

11号古墳から出土した土器は、III期、IV期と3時期の遺物が出土しており、上層の墓道からもIII期が出土している状況から、III期の土器は、古墳築造期、IV期は追葬の時期と考えたい。

このほか、玄室内や墓道から出土した土器や青磁は、14～15世紀の遺物と考えられる。

12号墳からは、杯身1点が出土した。III期に属している。

③ 石 棺

12号古墳石室内から出土した。凝灰岩片約100個を復元してみると、棺蓋3基、棺身3基に復元できた。その中で棺蓋身一対は大形で、2対は小形である。

石室内に、石棺を複数配置する例は非常に少なく、隣接する童男山古墳（1号）に好例が見られる。童男山古墳（1号）は、玄室奥壁に石屋形をつくり、その中に長方形刺抜の石棺を置

いている。左側壁側にも刺抜の石棺があり、右側壁側には現存残っていないが、石棺が置かれていた可能性が強い。12号古墳も、童男山古墳（1号）と同様、石棚下に大形の石棺を置き、小形の石棺を両側壁側に「コ」の字状に配置したものと推察される。

「コ」の字状に石棺を配置した例は前述した2例を省いてなく、類似したものとして熊本県竜北町大野窟古墳がある。^{註19} 大野窟古墳では、石棚の下に棺身を置き、両側壁側に板石で区画した屍床を設けている。石屋形を設置し、板石や敷石で区画した屍床を設ける例は多く、菊池市袈裟尾高塚古墳、山鹿市弁慶ヶ穴古墳をはじめ、熊本県北部地域に集中している。このほか、横穴墓中にも刺抜きで「コ」の字状に屍床を造り付ける例も多く、熊本県植木町亀甲東横穴墓群などは好例で、熊本県北部地域を中心として分布している。^{註20}

「コ」の字状に屍床を配置する構造は、5世紀後半以降に出現する肥後型横穴式石室の特色で^{註21} 6世紀代になって、石屋形前面左右に屍床を設ける型式に変化するものと考えられている。

石棺は、3対あり、1号棺は梁が走る切妻形家形石棺、2、3号棺は、いずれも天井部が平坦につくられており、家形石棺では最も新しい時期と考えられている。熊本県万日山古墳では、この最も新しい時期の石棺と石屋形が、石室内に収めてあり、6世紀中頃～後半の築造と考え^{註22} されている。

V おわりに

前章で、童男山11号・12号墳をはじめ、童男山古墳群についてまとめたが、石室の年代について11号は石室の形態、出土土器から、6世紀中葉頃に築造され、6世紀後半～末頃までの追葬が考えられる。12号墳は土器が少ないため明確ではないが、石室の形態や土器より、11号よりも遅れて6世紀後半頃築造され、数回の追葬を受けたものと考えられる。

童男山11号、12号墳の調査は、これまでナゾの多かった童男山古墳群の解明へ、一步を踏みだしたものといえる。しかし、童男山古墳群の周辺に多数存在する古墳についても未解明な部分が多い。今後は、これら周辺の古墳群との比較検討を加えていかなければならない。

註

註1 矢野一貞『筑後国史』 1926

註2 池田栄史『石屋形の成立とその系譜』『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』 1982

註3 佐田 茂『魅る古代の豪族磐井』『岩戸山歴史資料館展示図録』 岩戸山歴史資料館 1984

註4 小田富士雄『乗場古墳の調査』『立山古窯跡群』 八女古窯群調査報告Ⅳ 八女市教育委員会 1972

註5 黒野 肇、小田富士雄『塚ノ谷古墳』『管の谷窯跡群』 八女古窯群調査報告Ⅲ 八女市教育委員会 1971

註6 小田富士雄『釘崎第3号古墳』『管の谷窯跡群』 八女古窯群調査報告Ⅲ 八女市教育委員会

1971

- 註7 石山歎「鈴ヶ山古墳群の調査」「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ」福岡県教育委員会 1972
- 註8 神林淳雄「金銅装大刀と金銅製柄頭」『考古学雑誌』29巻4号 1939
- 註9 竹並遺跡調査会「竹並遺跡」 1979
- 註10 酒井仁夫「竹原古墳出土遺物」「金丸古墳」若宮町教育委員会 1975
- 註11 赤崎敏男「九州の圭頭大刀」「竹並遺跡」 1979
- 註12 平之内幸治「湯湧古墳群」宇美町文化財調査報告書 第4集 1984
- 註13 註10参照
- 註14・註15 神林淳雄氏資料(国学院大学蔵)
- 註16 福島雅義「七軒横穴群調査報告」矢吹町文化財調査報告書 第6集 1983
- 註17 町田 章「環頭の系譜」「奈良国立文化財研究所研究論集」Ⅲ 1976
- 註18 深瀬芳之「円頭・圭頭・方頭大刀について」「日本古代文化研究」創刊号 1984
- 註19・註20 註2参照
- 註21 松本健郎「中九州の横穴」「森貞次郎博士古稀記念古文化論集」 1982
- 註22 小田富士雄「九州」「日本の考古学」Ⅳ 1966
- 註23 佐田 茂「九州の家形石棺」「筑後古城山古墳」 1972
- 註24 乙益重隆「熊本市万日山古墳」「考古学集刊」第3巻 第3号 1967

童男山11・12号古墳

八女市文化財調査報告書
第13集

昭和60年3月30日

発行 八女市教育委員会
八女市大字本町647
印刷 青柳工業株式会社
福岡市中央区渡辺通2丁目9-31

古墳番号	所在地	立地	墳形(規模)	主体部	内部施設	開口方向	その他
1	大字山内字北童男	山頂	円墳 (48m)	複式横穴式石室	石星形刺抜石棺	南西	県指定史跡
2	大字山内字北童男	山腹	円墳 (22m)	複式横穴式石室	石棚 石棺	南西	『筑後將士軍談』 「利」
3	大字山内字北童男	山腹	円墳 (17m)	複式横穴式石室	石星形	南西	『筑後將士軍談』 「草」
4	大字山内字城の東	山腹	円墳 (21.5m)	横穴式石室		?	半壇
5	大字山内字城の東	山頂	?	横穴式石室		?	
6	大字山内字城の東	山頂 114.2m	円墳?	横穴式石室		?	全壇
7	大字山内字城の東	山頂	円墳?	横穴式石室?		?	
8	大字山内字城の東	山頂	円墳	複式横穴式石室		南西	
9	大字山内字城の東	山頂	円墳	複式横穴式石室		南西	
10	大字山内字城の東	山頂	?	複式横穴式石室		南西	
11	大字山内字上の原	山麓	円墳	複式横穴式石室	棺床	南西	昭和59年調査
12	大字山内字上の原	山麓	円墳 13.5m	複式横穴式石室 洞張り	石棚 石棺 3	南西	昭和59年調査
13	大字山内字城の東	山麓	円墳 11.5m	複式横穴式石室 洞張り		南西	
14	大字山内字城の東	山麓	?	横穴式石室		?	
15	大字山内字城の東	山麓	?	?		?	全壇
16	大字山内字上の原	山麓	円墳 7.7m	複式横穴式石室	石棚 棺床	南西	
17	大字山内字上の原	山麓	円墳 8.0m	複式横穴式石室		南	
18	大字山内字北童男	山頂	円墳 9.5m	複式横穴式石室		南西	
19	大字山内字北童男	山頂	円墳 32×50m	?		?	
20	大字山内字北童男	山頂	?	横穴式石室		?	
21	大字山内	山頂	円墳 25m	?		?	
22	大字山内字南童男	山頂	円墳 15m	複式横穴式石室	棺床(刺抜石棺)	南	『筑後將士軍談』 「元」
23	大字山内字南童男	山腹	円墳	横穴式石室		南	
24	大字山内字南童男	山腹	円墳 20m	?		?	
25	大字山内字北童男	山腹	円墳 20m	複式横穴式石室	石棚 棺床	南	『筑後將士軍談』 「貞」
26	大字山内字東館	山腹	円墳 10m	横穴式石室		?	
27	大字山内東館	山腹	円墳 21m	複式横穴式石室		南	

表1 竜男山古墳群一覧表